

阿島城原城跡

1991・8

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

阿島城原城跡

1991・8

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

喬木村では平成元年度事業として、阿島熊野地区に村営墓地の計画をたて造成工事に着手しました。此の地区は城原城址として村誌に記載されている所より北側に位置しており、はっきりした遺跡は確認されていなかったが今回の発掘調査により同時期に此の地に二つの城があったことがわかって来た。

発見された遺跡は地下約50cm位に数多くの石を敷き詰めたもので、城の本丸部分と見られる約350m²で屋敷の柱を支えたと見られる石組や通路や排水の役目を果すものと思われるもので、これを築くについては当時大変の苦労をしたものと考えられる。今から約400年以上は経ていると推定される巾1.0～1.4m、20cm前後の石が敷き詰められていたため、これらの状況を図上に再現し多くの皆さんに知っていただくようにするため調査は石の一つ一つまでも図示するという大変細い作業でした。又墓地造成事業との関係で調査期間が短かく調査に携さわられた皆さんは、お忙しい毎日であった事と存じます。

現地調査、資料整理、報告書作成にと格別の御盡力を賜りました佐藤魁信団長を始め調査員、作業員の方々の御努力と近隣の方々、地区の方々に大変御協力いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成3年8月

喬木村教育長 下岡重尊

例　　言

1. 本書は長野県下伊那郡喬木村阿島城原遺跡熊野地籍の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、喬木村北竪闇建設に伴う発掘調査を喬木村教育委員会が実施した。
3. 調査は平成2年3月下旬から4月上旬に行ない、平成3年に報告書を刊行した。
4. 報告書は佐藤がまとめ、遺構の実測は佐藤、牧内、田口が、遺物の実測を佐藤、製図は田口が分担し、写真は佐藤が分担した。
5. 遺物は喬木村歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図目次

I 環　　境	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 経　　過	3
III 調　　査　結果	5
IV 城跡の遺構	11
V ま　と　め	15
図　　版	17
調　　査　組織	25

挿　　図　　目　　次

第1図 阿島城跡位置及び周辺主要遺跡図	2
第2図 阿島城及び周辺地形図	4
第3図 阿島城熊野支城跡配石列位置	6
第4図 阿島城熊野支城跡配石列図	7
第5図 阿島城熊野支城跡出土遺物I	9
第6図 阿島城熊野支城跡配石列出土石器	10
第7図 阿島城熊野支城跡見取図	11
第8図 阿島城跡図(1:3,750)	12
第9図 戦国期知久神峰城を中心とした主要出城図	13
第10図 知久神峰城を中心とした主要城跡配置図	14

I 環 境

1. 自然的環境

阿島城原遺跡は長野県下伊那郡喬木村城原の段丘西端に所在する。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下して、その両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸・竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山(1741m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもしながら段丘面に達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の西岸・竜西地区に比し山麓からびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的には狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の三次原・田村原・林原・伴野原・喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く中位段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。

城原は喬木村の北西端にある低位洪積段丘にあり、標高494~520mを測る。南は加々須川・北は壬生川が流れ、比高約75mの侵蝕崖で切られ、西は75mの急峻な段丘崖となり、崖下は阿島の町並となり、さらに最低位の段丘面が続き、天竜川にいたる。

城原の台地の中央を東北東に土井場沢川がえぐりこんで、台地を南北に二分している。台地の中心は南側にあって城原段丘面を形成しているが、北側は土井場沢の侵蝕によって南面は削られ、北面は壬生沢川の侵蝕崖によって急峻な落ち込みとなり、屋根状をなして城原台地とつながっている。その一方、西にのびてその先端部に孤立した小台地を形成している。ここに支城跡があり、おくまんのん遺跡、熊野古墳がある。

南北150m、東西80mの三角形というより西側は抉りこみをなし、ハート形の台地をなし、標高494~496mを測る。

屋根となる稜線は東に延びて、喬木村と豊丘村の村境となって続き、南側に喬木村桃添・加々須の集落があり、北側には豊丘村壬生沢の集落があり、伊那山脈に至る。
(第1図)

2. 歴史的環境

城原の台地は、瓦土が採れ、昭和中頃まで瓦焼が行われていた。この土採りの際に弥生後期土器の出土をみており、また、縄文時代の打石斧等も表探されている。台地中央部に城原1号・2号古墳があったが消滅している。

阿島城原城跡が、この台地の西方の先端部にあったが、破壊されて、城跡としての遺構はみることができないと「喬木村誌」の『室町時代・神之峰城と出城』の項で述べている。



第1図 阿島城跡位置及び周辺主要遺跡図

1:25,000

1. 阿島城（本城） 2. 支城 3. 阿島遺跡 4. 郭遺跡・郭1号墳
 5. 燐牛原遺跡 6. 林黒遺跡 7. 伴原遺跡

城原台地の北に孤立する「おくまんのん一熊野」には熊野古墳があり、下伊那史第三巻によると、明治10年に古墳をこわし烟にした。この時直刀一口・こわれた埴3・土師器高杯台を拾得したが所在不明となっている。昭和45年2月、農業改良事業の一環としてブルトーザによる工事に着手したが古墳であることを知り、喬木村教委が緊急調査にかかった。その結果、古墳

としてはブルトーザの土の押し出したあの断面をみるとロームの盛土が43cmありこの下に黒土層があり、上層のロームは人工的なものとも考えられたが、古墳であったとは認められない状態であった。ローム下の黒土層を調査し、弥生後期中島式住居地1軒を発掘している。もとから、土師器片、黒曜石片が表採されていた。

城原の周辺をみると、段丘崖下には弥生中期阿島式土器の標準遺跡の阿島遺跡がある。城原と同位段丘の北には豊丘村の伴野遺跡があり、縄文中期後半の集落が発掘調査されており、南の加々須川を隔てた昂牛原は縄文中期から弥生後期の集落が発掘調査され、また、沖積段丘面には竜東唯一の前方後円墳第一号墳があり、江戸時代の知久氏の館址も存在する。南の段丘崖直下に室町時代中期に知久氏建立の安養寺があり、鎌倉時代より中世末にいたる竜東一円に勢力をもった知久氏の主要な拠点の一つの地域であったことが知られる。

(第2図)

II 経 過

平成2年(1990)3月中旬、喬木村北雪園建設工事が城原城跡の北西端部で開始された。喬木村教育委員会は、そこが城跡であることに気付き3月20日現地をみにいき、工事によって削り採られた跡に配石が三方にあることが認められ、銅鏡一面の出土をみた。そのため、至急調査すべきを決め、工事は一時中止し、県教委文化課に通報し、調査についての指示を依頼した。

調査日誌

3月23日(はれ) 配石調査にかかる前に、三方に拡がるとみる配石を、中心より北東に延びるを配石A、それより北に延びるを配石B、西に延びるを配石Cとし、起点を決める。

配石Aの調査にかかるが、配石の上にのる土は堅く苦労する。

3月24日(雨・25日は日曜日) 休み

3月26日(はれ) 配石Aの調査、配石の間より中世陶器小片の出土をみる。

3月27日(はれ) 配石A・Bの調査。県民文化課指導主事2名みえ協議。

3月28日(晴・くもり、のち雨) 配石Aはほぼ終わり、B・Cの調査。

3月29日(雨) 休み

3月30日 配石Bの調査を終える。配石Cの調査。配石Aの北側に礎石のあった跡とみる礎のかたまりを数個所に検出するが、すでに重機により表土が排除され、崩されており建物址としては把握できなかった。

配石Cは中間部よりさらに北西にのびる配石Dを検出し、配石間より常滑窯片の出土をみる。

3月31日(雨)・4月1日(日曜日) 休み

4月2日(はれ) 作業員少なく、作業はかどらず。配石Cの調査を終わり、配石Dの調査に



第2図 阿島城跡及び周辺地域図 (1.城原, 2.熊野)

かかり、配石Aの測量にかかる。

4月3日(はれ) 作業員少なく、配石Dの調査。配石A・Bの測量を終り、配石Cの測量にかかる。 4月4日(雨) 休み

4月5日(はれ) 作業員多くなる。(1日~3日まで地区的祭り)配石Dの調査すむ。配石A・Bの断面調査。

4月6日(くもり・時々小雨) 配石Dの下段にのびる配石Eを検出・調査。配石Cの測量。

4月7日(くもり・おそくなつて雨)、配石Eの調査。配石C・Dの測量。

4月8日(大雨) 休み

4月9日(はれ) 配石Eの調査終わり。測量C、Dの断面調査。配石全面の清掃(前日の雨で水がつき排水、泥のかぶりをとる。)

4月10日(はれ) 配石Eの測量を終り、全体測量、写真撮影をなし、現場調査を終わる。器材撤収する。

その後、遺物整理、実測作図、図面、写真撮影整理等を行なう。靈園工事完成後に城跡の再調査を行ない、空堀・出曲輪・帯曲輪の調査をなし、城原城跡の見取り図を作成し、平成3年にはいって報告書の作成にかかる。

喬木村誌の記述をしらべ、また7月19日に喬木村史学会で参会の会員の方々に、城原城跡はどこにあったかを聞き、翌日、かって瓦屋をしていた松沢さんを頼み、城原城跡のあとを調査し、阿島城跡を確かめる。

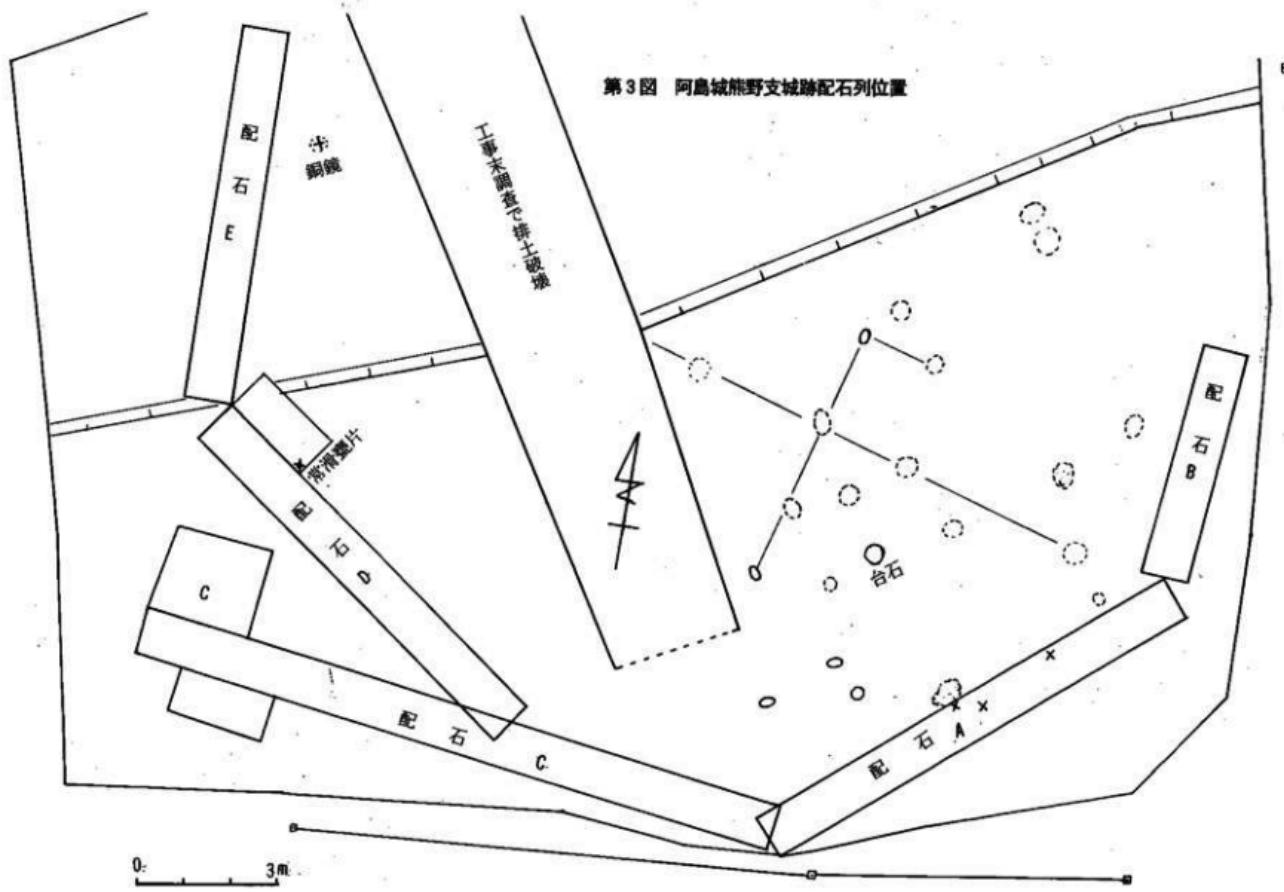
III 調 査 結 果

本次調査前に工事区域全面の表土は重機により削り採られ、台地北側は3分の2以上が調査不能となり、また、残る調査区域の中央西側を北々西に向って幅2~3mの道路状に深く削られ、造構は破壊されていた。

検出された造構は、配石列と建物址ともみる跡のかたまりであるが、これは重機で削られ、はっきりした造構をみることができなかった。

1. 配石列(第3図・第4図)

配石列は、東西23m、南北13.5mの半円状の範囲に、五箇所に角をもち、幅0.5~1.5mに疊を敷き詰め、北側は空白となる配石群である。配石は5列にA~Eに分けられ、各列は幾つかのパートをもって、疊の密集する部分と、まばらな部分とがあり、特に配石Cの西側の半分余は、散らばりをなし、配石列からはずれているともみる。





2. 配石列出土遺物（第5図1～6・第6図2・3）

出土遺物は上層は重機により排土されたため不明となったものが多いとみられ、量は少ない。配石Aの石の間にはさまれて出土した第5図3～6と小片数点があり、3は天目茶碗の底部で内面は鉄軸がかかる。5・6は常滑系の大甕片とみる。第5図2・4は配石Dの出土で3片があり、常滑大甕片の自然軸のたっぷりかかるものであり、無軸が1片出土している。

第5図1の銅鏡の出土地は確かにできないが、バックホーンの運転手の説明によると、「配石DとEとの境の段差の上をすきとり、ここにあけたところ鏡がでた。」とのこと。出土直後に現場状況を視察にいったとき（3月20日）である。この話からすると銅鏡の出土位置は、配石Eの南先端部と思われる。

銅鏡は、比較的保存状態がよく、内区の文様の菊花文、紐の亀甲文がはっきりみられる。亀の頭の先に2羽の鳥が羽をひろげ飛ぶのが拓本でははっきりみられた。内区と外区を分ける二重円闇を廻し、縁は厚い。紐をはさんだ二孔には紐が通されて残る。亀紐菊花雙雀文鏡とみたい。

配石から出土した陶片・銅鏡は15世紀末から16世紀前半のものであり、城跡築城を決めるものとみられ、配石の時期を決めるものもある。

配石中より出土した石器片に、第6図2は破片であり、はっきりしないが、両面とも磨かれた安山岩製で円形をなすとみる。この形からみて石臼の縁ともみたい。

3. 建物址とみる遺構（第3図）

配石Aの北、配石Bの西に約8×7mの範囲に土台を置いたとみる跡のかたまりが散在している。重機により排土跡に残ったものであり、建物址とみる方向性の整ったものは、2列ほどみられるが、この西側は未調査で深く排土されており、建物址として確かめることはできなかった。しかし、配石列との関連からみて建物址の存在は予想される。

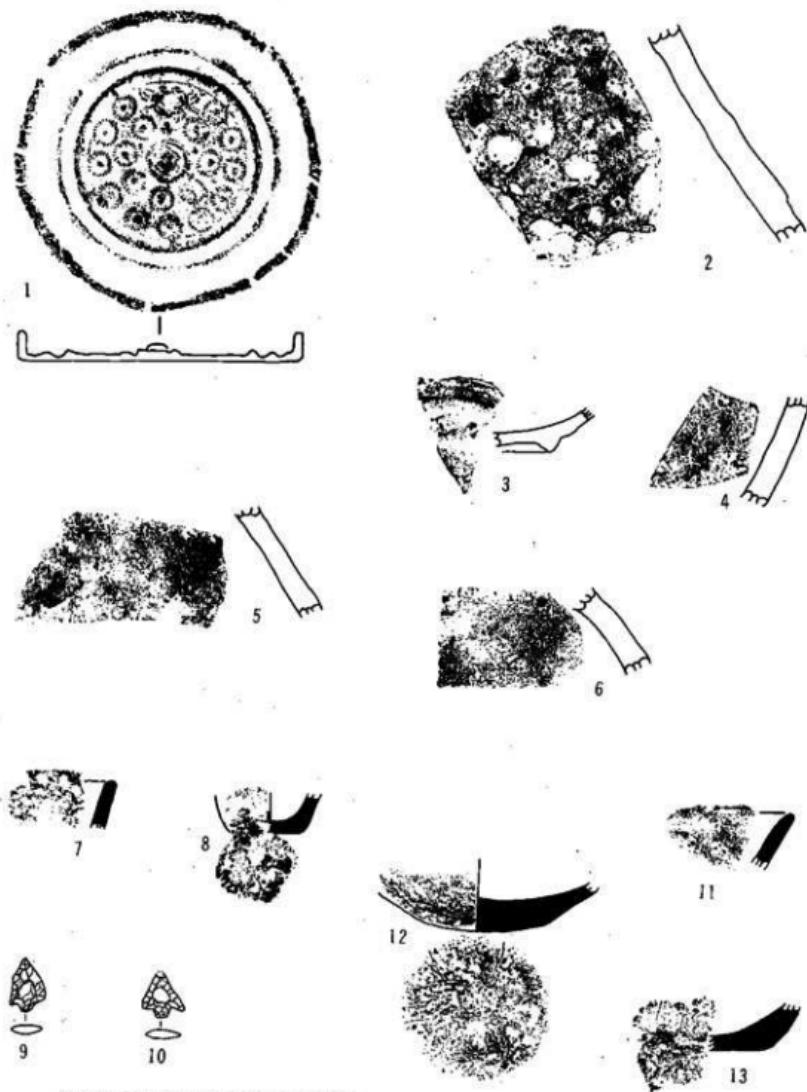
出土遺物は第6図1の台石のみである。砂岩製、25～28cmの円形をなし、表面は磨かれており、砥石として使用されたものとみる。

4. 遺構以外の遺物（第5図7～13）

7～10は、配石Aの南側周辺に出土し、7は口縁に押圧痕をもち、かすかに磨消繩文がみられ、繩文後期土器とみられる。8は手づくね土器とみられる底部で時期ははっきりいえない。9・10の舌をもつ石鎌で繩文後期に多くみられるものである。

11～13は、工事によって削りとられた配石北側の二・三段の段をもつ北東端部に出土した古墳時代後期土師器であり、消滅した熊野古墳の存在したところである。

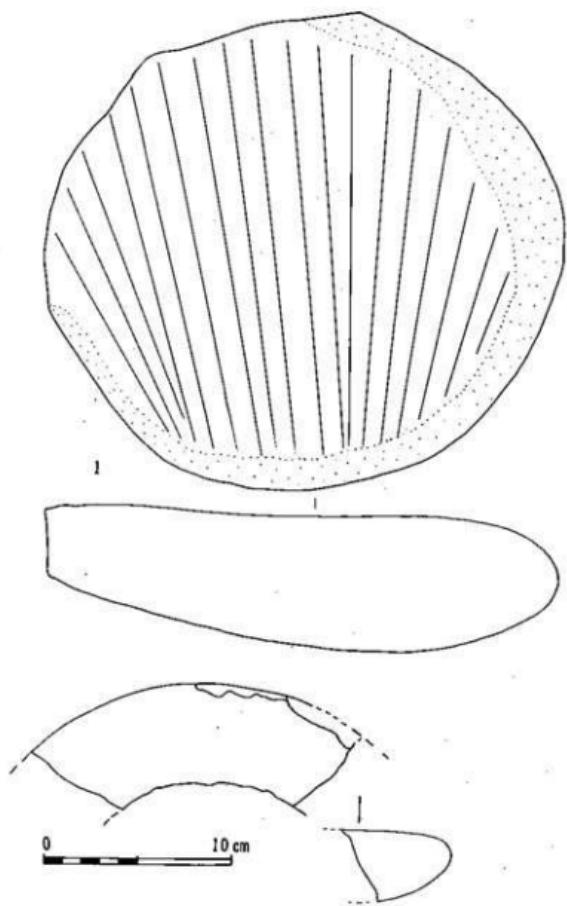
また、西側の削りとられた二・三段よりは黒曜石片が多くみられ、繩文前期の遺構の存在も予想された。



第5図 阿島城熊野支城跡出土遺物 I

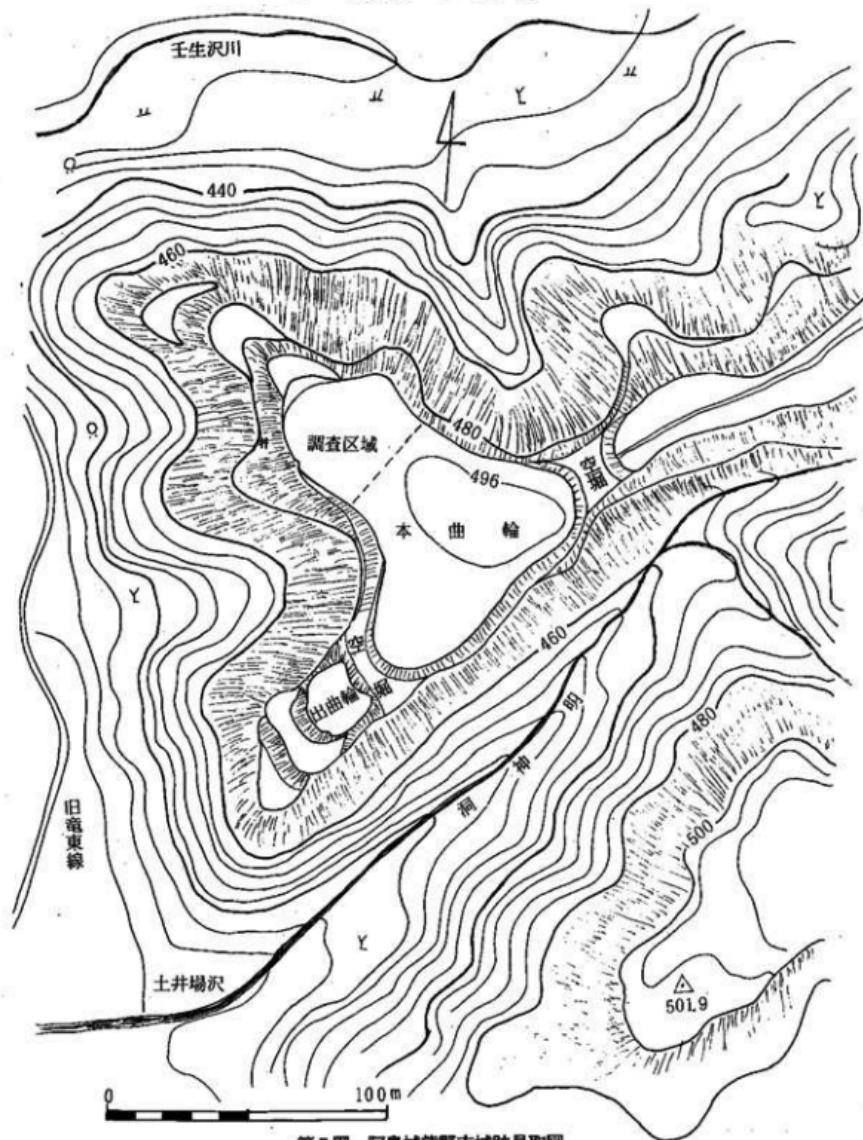
1～6……配石にはいり出土、7～10……配石A東側周辺出土
12～13……工事による 北側二・三段に出土



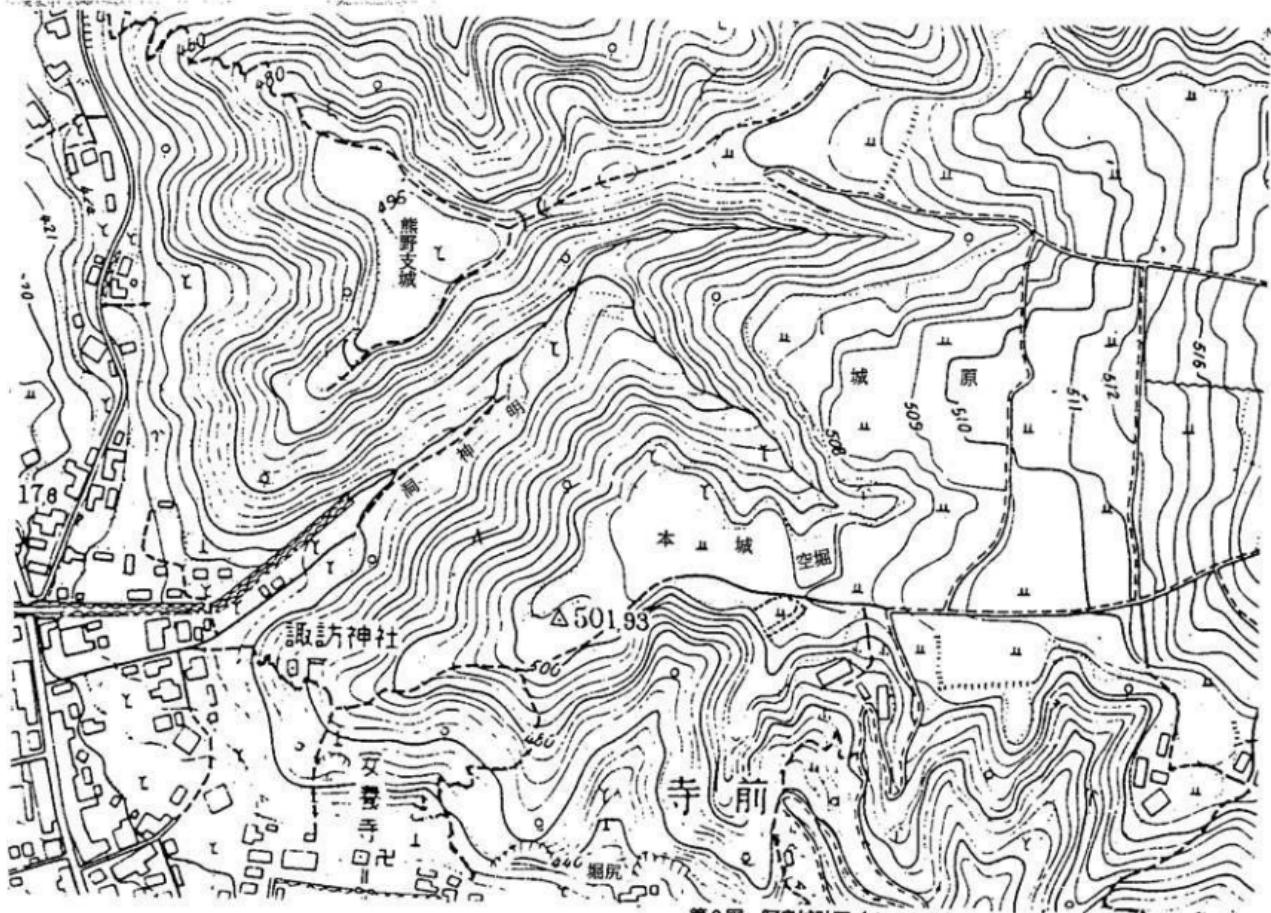


第6図 阿島城熊野支城跡配石列出土石器

IV 城跡の遺構



第7図 阿島城熊野支城跡見取図



本曲輪とみるは、南北150m、東西80mの三角形をなす範囲にある。本次調査はこの北東端部に突出する一部であり、城跡への北からの登り道に面する地点である。曲輪の防備に重要な施設をもった場所であり、その備の一部として残ったのが配石列とみたい。

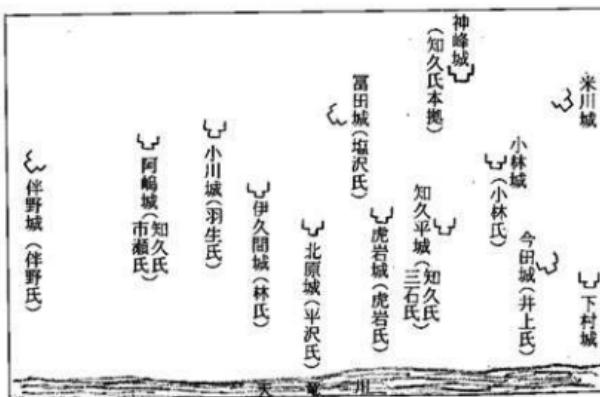
城跡全体をみると、東から屋根状に続き城跡の孤立する台地に入る手前の括り部は空堀となり、幅20m、深さ5mをはかり、現在はブロック積みの橋となっている。

城跡の北西端の突出に出曲輪があり、一辺が20m程の隅丸方向形をなし、現在南東側は畠を広めるため崩されているが、幅8m、深さ3mとみる空堀によって切られている。(第7図)

北東側が配石をもつ連構と、北西側の出曲輪の先は急しゅんな段丘崖を下る道となっており、その下る途中に前者では三個所、後者では二個所の平坦面を残し、帯曲輪とみる。

喬木村誌にみる阿島城原城址

喬木村誌の記述を要約すると、阿島城原城址は、城原の段丘上にある。南は加々須川、西は天童川の氾濫低地、北は明神洞と三方がいずれも約70~80mの峻岨な段丘崖に囲まれいかにも天然の要害となっている。しかし城址といっても今は破壊されて遺構としてみるべきものは少ない。台地の東方に深い段丘崖が南北から迫り、首のように細くなった地帯があるが、昔はここを利用して堀が構築されていた。昔は完形に近い堀の原形を見ることができたが、近年付近の瓦屋さんが粘土を採集して耕地整理をしたため、原形は崩され今では僅か一部分の址が残っているに過ぎない。この堀に続く南面の段丘崖の裾に「堀尻」の屋号の家がある。この堀より



第9図 戦国期知久神峰城を中心とした主要出城図
(平沢清人「下伊那地方の村落の変遷と町村合併」昭. 43)



第10図 知久神峰城を中心とした主要城跡配置図

- 0. 神峰城
- 1. 知久平城
- 2. 伴野城
- 3. 阿鳥城
- 4. 小川城（松下城）
- 5. 伊久間城
- 6. 富田城
- 7. 北原城
- 8. 虎岩城
- 9. 小林城
- 10. 今田城（鬼城）

西側の一帯が阿島城原城址で、殆が田畠である。

今この台地上には城郭の遺構は認められない。この台地に近接する西面の段丘崖上部に小台地が二箇所あるが、これは当時の山城形式からいって城郭の遺構と推定する。(喬木村誌、第二編古代・中世社会 第四章室町時代 第五章節神峰城と出城 7、阿島城原城址)

以上の喬木村誌の記述には、明神洞を隔てた北にある今次調査の城郭についてはふれていな

い。
平成3年7月19日、喬木村史学会の席で参会の皆さんに城原城跡についてお聞きしたところ、多くの方から熱心な発言があった。それによると城原の中ほどの両側に堀があつて、真中にあら細い道をとおって田畠に行ったとのこと。堀は今埋っているが、南側の堀の真下にある家の家号を「堀尻」ということからもそこに城があったの声であった。

その翌日、地元の瓦屋をしていた松沢さんに城原一帯を案内していただき、城郭の空堀あとを確認できた。南側空堀は、瓦土を採集した跡をならし、空堀を埋めたことが明らかとなり、北側の堀は、昭和35年3月国際航業KK調整の「小渋川地区計画平面図其の3」によると、幅30m、北から南に長さ約50mに空堀の形態を見ることができる。昭和51年(1976)に農業構造改良事業によって埋め立てられ、その痕跡はジャラとコンクリート壁でふさがれているのが見られた。(第8図)

V ま と め

城原には、今次調査した熊野に城跡がある、一方、今までに知られていた城原との二箇所に城跡が構築されたことが確かめられた。

城原に構築された城郭は160×80mの範囲にあり、北に熊野の今次調査の城跡を見下し、知久氏本拠の神峰城を見通す位置にある。熊野の城跡の2倍余の規模をもつていて、城原に城を築き、北への防備のために、西から北東と見晴し、展望のきく熊野に支城を構築したと考えたい。

平沢清人「知久氏と知久郷」『下久堅村誌』によると、阿島は早くから知久領であった。寛正元年(1460)4月8日、諏訪社上社で明年花会頭役をきめたとき「一御堂 安嶋知久弾正少弼俊範 御荷之札一貫八百文 頭役拾貰」とある。伴野氏らが知久氏の被官となるまでは阿島は知久氏の北端であった。ここに代官市瀬氏を置き、その守りとしたらしい。文明13年(1481)4月8日 諏訪上社明年花会頭役をきめたとき「一礎並、安嶋知久殿知行 代官一瀬和泉守盛次 御荷札一貫八百、頭役拾貰」(諏訪御荷札之古書)とある。

この諏訪御荷札之古書によれば、安嶋(阿島)知久殿知行とあり、その前の寛正元年の文

書では、安崎知久弾正少弼俊範とある。城名はその所在地名によるもので阿崎城が正しいと思われる。

後に城のあった地名を城原としたため、阿島城原城跡としたものである。

天文二年(1533)文永寺の本山京都の理性院住持巣助が文永寺で行われた結縁灌頂に導師として招かれたときの巣助の記した「信州下向記」のところどころに神峰城が知久氏の常住となっていたことがみられる。また知久氏の出城についても知ることができる。(第9図)

知久平の出城には知久助四郎頼恒が居城し、小林城には知久美作守(小林氏)、阿崎城には知久近江守が、虎岩城に虎岩(知久)玄蕃が居住し、北原城には平沢氏、富田城には塩沢氏、小川城(松下城)は羽生氏、伊久間城に林氏、伴野城には伴野氏、今田城(兎城)に井上氏が居城して神峰城を囲んで天竜川西に対していたとみられる。(第10図)

巣助は天文二年(1533)に文永寺に結縁灌頂にきた時の「信州下向記」から、その後の「巣助往年記」に武田氏が下伊那へ進攻するまでの文永寺と理性院の関係を記している。

それによると、天文二十三年(1554)八月十五日武田氏は文永寺、安養寺を焼き、神の峰を攻めた。(巣助往年記訓説)八月十五日、信州文永寺その他知久郷を放火す。甲州より乱入と云々。

武田氏の進攻によって、一時知久氏は滅び阿島城はどうなったかの記録はない。おそらく安養寺の焼かれた時に城も焼かれ、廃城となったものと思われる。

今次調査した熊野支城の配石列については、配石の北側には北の要所に構えた施設があったとみられるが、調査前に重機によってけずり採られ不明となったのが惜しまれる。

配石中より出土した銅鏡・常滑甕片・天目茶碗片等出土量は少ないが、知久氏配下の有力武将をここに配置したと思われる。

また、これら出土品が15世紀末から16世紀前半であり、阿島城に関する諸記録とも同時期であり、築城の時期を決めるものとみられる。

阿島城に関しては、遺構は僅かに残るのみで、十分な調査も行われず破壊されており、城跡に関しては伝承と、土地の古老の記憶による以外に知ることはできなかった。

このため多くの問題をもつものであり、城についての研究不足もあって不明な点、誤りも多いと思われる。大方の御教示をおねがいいたしたい。

おわりに、本次調査にあたって、地元の方々の御協力、作業にあたられた方々の御骨折りのあったことを深謝したい。

(佐藤赳信)



阿島城熊野支城跡（北東より）



阿島城熊野支城跡（東より）

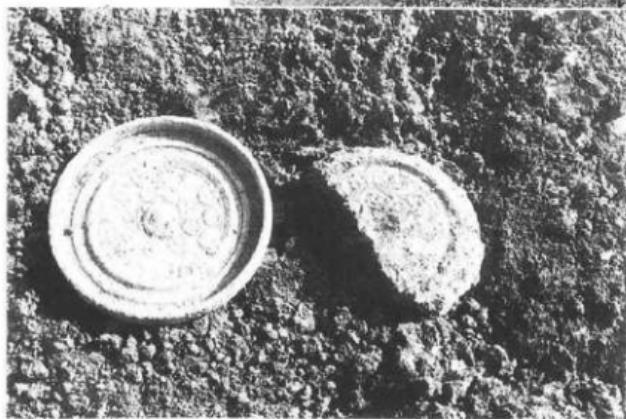


熊野支城跡 空堀の橋



空堀の橋

V字形の掘あとがみられる



銅鏡の出土

(バックホーンの
土をあけた時に見られた)



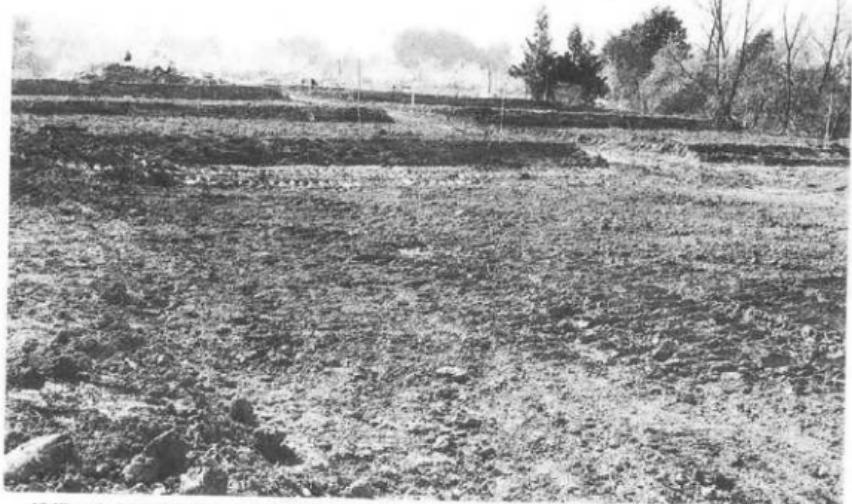
阿島城跡本城より
見下した熊野支城



出曲輪



出曲輪の空堀



造構の大半は調査前にすでに排土されていた



配石列 北西より



配石列 北東より



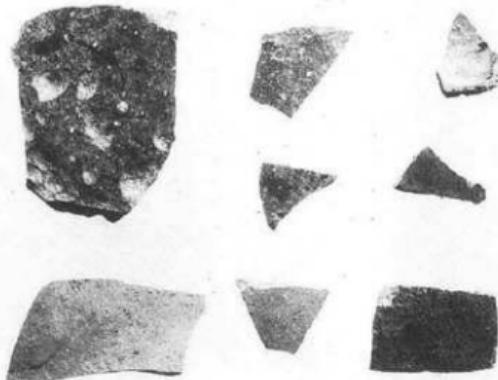
配石列 A列



配石列 C・D列



銅鏡



配石列中出土陶器片



造構内出土 石器

造構外 出土縄文後期 土器・石器



阿島城本城跡
東より



阿島城本城跡
西より



調査にかかる

配石列測量



配石列の検出・調査



配石列の測量

調査組織

1. 阿島城原遺跡調査委員会

中川 黙 喬木村教育委員会委員長
下岡 重尊 喬木村教育長
桐生 文雄 喬木村教育委員
鈴川 英人 "
東原 美寅 "
原 五郎 喬木村文化財保護委員会委員長
黒川 良一 喬木村歴史民俗資料館専門主事

2. 調査団

団長 佐藤 魁信
調査員 牧内 住子
調査補助員 松下 真幸
" 田口 さなゑ

3. 作業員

福島 明夫 岩間 幸子 池田 誠人 宮沢 謙
仲田 順子 大原 久和 仲田 国男 大平 正子
矢川 民衛 下平 智子 羽生 朝子 佐藤 いなゑ

4. 事務局

柳沢 治人 市瀬 武文 原 俊道

阿島城原城跡

- 1991. 8 -

発行

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 備秀文社

